学園吸血恋愛奇譚――その初恋が実るとき――

秋月　ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園吸血恋愛奇譚――その初恋が実るとき――

【Ｎコード】
Ｎ４４８１Ｐ

【作者名】
秋月　ヒロ

【あらすじ】
俺、敷島真次は割とはみ出した方だ。
なにしろ、不良のレッテルが貼られてるくらいだからな。
…最近はケンカなんかしてねーぞ。
相手がいないからな。
そんな俺はある夜、学校で死んでしまう？
あれ？俺、生きてるぞ…？
よくわからないまま学校に行くと、転校生が…そいつは、俺の幼馴染だった！！

しかも席が隣って、ハァ？それなんてラブコメ？
しかしあいつには人には言えない秘密が…
けんかっ早い少年と、とある少女が軸に繰り広げられる、学園妖怪
バトル・ラブコメディ―？開幕っ！！

ＳＨＲ　在りし日の思い出

「あれ…このあたりだと思ったんだけど…」
僕は公園の植木がたくさん並んでいるところを歩いている。
「うっ…ふぇぇ……」
また、僕の耳に女の子の泣き声が届いた。
「こっちかな。」
ガサガサと、背の低い木を乗り越えて声のした方に歩いていく。
ちょっとづつ泣き声が近くなってきた。
目の前にある木の裏側を覗きこんでみると…
「うえぇ……ん…うぅ…うっ…ふえぇぇぇ…」
白い髪の毛の女の子が、木の根元に座り込んで泣いていた。
僕はその子に話しかける。
「おい、なんで泣いてるんだよ。」
「ふぇ……？だれ…？」
その子は、半分うつむいたままそう聞いてきた。
「だれでもいいだろ。なんでないてるんだよ。」
ぼくがいうとその子は初めて顔を上げた。
その子は、赤い眼に涙をためたまま僕の顔をじっと見ていた。
赤い眼っていうのは、泣いていたからじゃなくて、黒目のところが赤いんだ。
そのままじっと見つめあって、なんだか恥ずかしくなったから、もう一回、
「なんで、一人で泣いてるんだ？」
と聞くと、その子は、
「一人だから……」
と、またうつむいて小さな声で言った。
「じゃぁ、僕が友達になってやるよ。ぼくはしきしましんじ。おまえはなんていうんだ？」

僕は、自然にそう言っていた。
「・・・いじめる？」
「いじめねーよ。友達になってやるって言っただろ。逆にお前をいじめるやつがいたら僕がぶん殴ってやるよ。」
そういうと、この子は、
「しゅり。わたしは、ゆめさきしゅり。」
そういった。
「でも…いいの？わたしは――――――なんだよ？」
「べつにいいよ。ともだちっていったからな。」
「・・・わたし、あんまりひのあたるところにいると、あかくなっちゃうからあそべないよ？」
「かげであそべばいいんだろ？僕のけんかのはなししてやるよ。」
「でも…」
「しつこいぞ。僕がいいって言ってるんだからいいんだよ。」
「…うん。」
そう言って、その子はにっこりと笑った。
その顔は、とっても、とっても、かわいかった…

これは、俺が小学に上がる直前くらいの時の出来事。
――――――今思えば、この日からこの物語は始まっていたのかもしれない。
――――――普通の人間が体験するはずもない、この、変わった恋の物語は。

ＳＨＲ　在りし日の思い出（後書き）

前作が終わってないのにもう一作始めるという無謀なまねに出た、出雲　神在月であります。とりあえず、こっちも不定期更新。気分で上げていきます。こっちも感想待ってます。

一限目　俺が死んだ日

「くそぉッ…何なんだよッ…！！！いったいっ！！」
俺、敷島真次（しきしましんじ）は、自分の通う高校である新月学園（にいづきがくえん）の廊下を走っていた。
それだけなら、別に普通の光景だろうう。
……時刻が夜であるということを除けば。
なぜそんな時間にそんなところを走っているか？
大した理由じゃない。
少なくとも、学校にいるのは大した理由じゃない。
ただ、ちょっとミスって机の中に携帯を忘れたから取りに来ただけだ。
じゃぁ、なんで走っているかっていうと、追われているからだ。
別に教師に見つかったとかじゃない。
というか、そっちならどんなに良かったか。
やつは、どこでそんなもん手に入れたかしらねーが、日本刀を振りかざして俺の後ろを追ってきていやがる。
まったく、命からがらってやつだ。
ただひとつよかったことは、携帯を回収してから襲われたことだな。
通り過ぎていくドアの数々を尻目に、走る、走る、走る…
このまま逃げられる、とそう思った。
ところが、一階と二階の間の踊り場まで逃げた時、バリィンッ！！という、ガラスの割れたような音が足元からしたと思ったら、わき腹に熱い感触が生まれた。
「がっ……何だよッ…これ…」
熱い感触が下へ下へと、皮膚を伝って落ちていく。
顔が自然と、踊り場に置いてある姿見へと向く。
そこには、わき腹に風穴をあけて、ドクドクと血を流している俺

が映っていた。
「あ、はははははは…」
――――――笑いが、こぼれた。
医療の心得なんかなくても、見ただけでわかる致命傷。
絶対に、助からない。
携帯のバッテリーは切れちまってるしな。
助けも呼べねぇ。
ぐらり、と世界が曲がる。
俺は、踊り場に倒れた。
窓の下を見ると、バカでっかい蜘蛛が校庭に立っていた。
「は、はは、はははは…血が足りないせいか？」
もしくは頭がイカレたか？
あんなありえないものを見るとか、それこそありえん。
視界がゆっくりとぼやけていく。
痛みで思考も鈍ってきやがった。
「まだ、死にたくなかったな…」
かつ、かつ、かつ、と、だれかが階段を上ってくる音を聞きながら、そう呟く。
いろいろ、やり残したこのあるもんなぁ…
だんだん自分の体が冷たくなっていくのを感じながら、そんなことを考えていた。
「あぁッ…そんなっ…」
ぼんやりした意識の中で、女の子の声を聞いた気がした。
「ごめんなさい…巻き込んで。あなたは、死なせないから。」
あぁ、もしかして幻聴か？ならこの声にも納得がいくぜ。
懐かしいなぁ、懐かしいぜ。
あいつが今くらいの年になってたら、こんな声だろうな。
…おれが会いたいって、そう思ったからなのか？
「ぁ……し…ないか……ぜっ…ゆ…だ……ら…」
俺の眼に、新月の制服である紺のブレザーがぼんやりと移り、そ

れを最後に俺の意識は、ぶっつりと途切れた……

一限目　俺が死んだ日（後書き）

前作とは違い、あんまりこの作品は先を考えてません。
大丈夫だろうか…
感想お願いします。
誤字の報告とか、指摘、アドバイスなども歓迎です。

二限目　懐かしの美少女、転入生は幼馴染！？（前書き）

今回はなんだか長くなってしまいました…
途中で切るとかなかなかできないめんどくさい性格です…

二限目　懐かしの美少女、転入生は幼馴染！？

「はっ！！！」
気がつくと、俺は自分の部屋にいた。
外は快晴、ベッドには秋のくせに元気な太陽の光が差し込んでいる。
もっとも、まぶしいだけで最近の気温が高いというわけではないが。
ぼんやりと窓の外を眺めながら、濁った思考を回転させ、記憶を整理する。
…えぇと、何だ、今ここに俺がいるということはつまり…
「全部…夢…？」
そう考えるのが正しい気がするな。
だってそうだろ。
あんな、それこそ警察沙汰になるようなことが現実に起こるわけがない。
「はぁ～、なんだよ…」
ぐでーッと体を折り曲げた時、ようやく自分にある違和感に気づいた。
なんとなく、体が窮屈なのだ。
そしてその違和感の正体は…
「って俺制服のまま寝てるじゃん。うわー、しわにならないかなこれ。」
そう、なぜか俺は制服のままベッドで寝ていたのだ。
なんとなく時計を見ると――――時刻は八時。
「…学校行くか。」
学校まで徒歩十分というそこそこの距離に住んでいる俺は、八時に家を出ても十分間に合うのである。
かばんを持ってリビングに降りると、机の上には弁当と紙きれが

置いてあった。
『昨日夜遅くに返ってきた真次へ
携帯は見つかった？お母さん、真次が警察のお世話になってないか心配してたんだけど、大丈夫みたいでよかったです。
お母さんは仕事に行きます。起こしても起きなかったからほっとくけどいいですね？お母さん起こしたからね？弁当は机の上にあります。じゃぁ。
母より』
とか書いてある紙きれをいつものように破ろうとして、あることに気づく。
「は…？携帯は見つかった？あれ…？あれは、夢じゃねえのか？」
確かに、俺は昨日部屋に帰って寝た記憶がない。
しかし、部屋で寝てたんだからそれしかあり得ない。
だから、学校から帰ってきて、疲れて寝ちまったんだろう、と思ってたんだが…
「なんか、いろいろとつじつまが合わなくないか？」
ちなみに携帯はしっかりとズボンのポケットに入っている。
だから、昨日の夜携帯がないというのもありえない。
「いかん、頭が痛くなってきた。学校行こう。」
そう呟き、弁当をかばんに押し込んで俺は家を出た。

☆　☆　☆　☆　☆

教室に俺が入ったのは、八時十五分だった。
まだかなり余裕がある。
俺はポケットから、銀色の十字架の付いた携帯を取り出し、それを眺めながらぼんやりと昨日のことを考えていた。
が、わからないものはわからないので、どんどん思考の焦点がずれていく。
「そういや、あの夢にもあいつが出てきたな…」

そう呟き、十字架を眺める。
あの時のあいつの声が耳によみがえる。
――――この十字架を、私だと思ってずっと持ってて。
これは、俺の最初の友達が引っ越すときにくれたものだ。
以来、ずっと肌身離さず持っている。
あいつ今頃どこで何してんのかな――――――
スパァ――――――ンッ！！！！
小気味いい音と同時に脳天に響いた衝撃に、俺の頭は強制的に現実（アル）に引き戻（リ）された。
「よっ、何やってんだよ真次。オメ―朝から暗いぜ？」
俺にこんな真似ができる命知らずは俺は一人しか知らない。
「…ブッ殺されたいのか、連一。」
霧花　連一。
だれとでも仲良くなれる、俺とは正反対の殊勝なやつ。
こいつがなぜか俺によくからんでくる。
そのせいで、今では名前で呼び合うくらい仲良くなっちまった。
「はっはっはっは。わりぃわりぃ。しかしお前、相変わらずの茶髪だな。染めた？」
「染めてねぇ！！地毛だ！！」
ちなみにこのやり取り、二年になってからでもゆうに百回を越えてる！
そんな馬鹿に、俺は真剣な顔で告げる。
「連一。俺は今機嫌が悪い。ようがないならおれの視界から消えろ。」
「用ならあるぜ。特ダネだ。なんとな、今日このクラスに転校生が来るんだってよ。しかも超美少女。特ダネだろ？」
…俺はあんまりそういうことに興味が持てない。
なぜかはわからない。
ただ、心の奥底に何か引っかかってる気分になるんだ。
「どうでもいい。」

当然、俺はふいと横を向く。
「ハァッ…！？おまえ、頭大丈夫か！？」
「安心しろ。少なくともおまえよりかは大丈夫だからな。」
俺がそう言いながら連一のほうを見たら、野郎エイリアンを見るような眼で俺を見ていやがった。
ムカついたからとりあえず顔面に一発入れとく事にする。
「いつつ…なぁ真次、おまえさぁ前から思ってたんだけど。」
「なんだよ。」
「おまえ、これなのか？」
ゴスッ！！ムカついたので再びやつの顔面に拳を叩き込む。
「黙ってろ。あと違うからな。」
「へぇへぇ、わかりましたよ。」
馬鹿はそう言いながら自分の席へ帰っていく。
そしてやつが自分の席に座った瞬間、教室のドアが開き担任が入ってきた。
いつものことながら何なんだあいつは。
つか担任、えーっと名前は…もういい斎藤先生（仮）でいいや。
あんたもチャイムよりも早く来るのがあたりまえってどういうことだよ。
「え―今日は、転入生が来ています。これでうちのクラスの席はすべて埋まるわけになるんだが…入ってきなさい。」
教室に入って開口一番、斎藤先生（仮）はそういった。
まぁそうだろうなあ…
連一（あのバカ）の情報はなぜか確実なんだ。
がらり、とドアが開き一人の少女が入ってくる。
教室中の視線が彼女に集められる。
なぜなら、彼女がとてもかわいかったからだ。
だが、彼女が入ってきた瞬間、俺は茫然としてしまった。
その出会いは、あまりにも突然で。
――――一人だから…

その別れもあまりにも突然で。
――――真次君！！遊ぼう！！
だから、簡単に再会できるだろう、とは思っていたけどな。
――――私のこと、忘れないでね…
まさか、こんな形でだなんて想像もしてなかったぜ。
――――私は――――なんだよ？
またお前と一緒に過ごせるのか。
――――ありがとう、一緒にいてくれて。
黒板の前に立った、白銀の髪と深紅の瞳とそれから、右頬に大きな傷跡のある美少女は、変ったようで、変わってない笑顔でこう言った。
「はじめまして。今日から新月学園の一員になる、夢前朱理（ゆめさきしゅり）です。みなさん、よろしくお願いします。」

二限目　懐かしの美少女、転入生は幼馴染！？（後書き）

はい、というわけで登場しました朱里ちゃん。
とりあえず今回は顔見せ程度ですかね。
どうやって真次の悪友である連一を物語に入れるか検討中。
まぁ、何とかなるでしょ。
とりあえず、感想とか、誤字脱字の報告、何でも結構なので書いてください。
お待ちしてまーす。
さて、次どうしよう…

三限目　ラブコメ的席順

「なッ……！！！」
俺は担任の言葉を聞いて思わず固まってしまった。
そりゃ、確かに俺の席は最後尾だが。
そして俺の席は窓際にもかかわらず、なぜか隣りは空席になっているが。
だからって、だからってお前それはねーだろうよ。
あまりにもアレな展開に、俺の脳内では理不尽極まりない文句がぐるぐると回っているが、勿論一つとして口には出さない。
ちなみに、俺の隣が空いてるのは座りたい人がいなかった…わけではなく、向こう（担任）が勝手に空席にしやがった。
気をまわしたつもりかこの野郎。
少なくとも一人は、俺の隣に座りたいやつを知ってるぞ。
…話がそれた。
朱理の自己紹介が終わった後、あいつはこっちを見て渋い顔をしながら、
「じゃあ・・・悪いがゆめさきはしばらくの間敷島の隣の席に座ってもらおう…」
と、ぬかしやがった。
何が悪いんだよコラァ。
朱里は、『敷島』という名字に少しだけ反応したが、何も言わずにこっちに歩いてきた。
しかし、みんなの視線が集中してるぞ、すげーなぁ。
俺の目の前に来た時、目は合わせなかったが小さな声で、確かに、朱理はこう言った。
「ただいま…」
と。だから俺も、いつもどうり窓の外を眺めながら言葉を返す。
「お帰り…」

と、小さな声で、懐かしむように。
朱里に届くようにはっきりと、呟いた。

☆　☆　☆　☆

大体、転校生ってのは二つの種類に分けられる。
一つ目は、社交的なタイプ。
自分から積極的に周りとかかわり、短い間に多くの友達を作ろうとするやつ。
もうひとつは、消極的なタイプ。
自分からは動こうとせずに、周りに壁を作るやつ。
で、朱理はどっちかっつーと後者だ。
俺の知る限り。
なんだが、周りがどう動くかってのも二つに分かれるわけで…

「夢前さんって、どこ中学出身なの？」
「好きな物とかってある？」
「スタイルいいよねー。スリーサイズ教えてよ。」
…どこの高校でも、こういうやつらはいるもんだ。
無駄に好奇心旺盛な女子。
そいつら…８人くらいが、朱理の机を囲んで質問攻めにしていた。
やめてやれよ、朱里は人付き合いが苦手なんだよ。
めちゃくちゃ困った顔してんじゃねーか。
休み時間のたび繰り広げられているこの光景。
…ちなみに今は昼休みだ。
さて、と。
これはあんまり使いたくない方法なんだが、仕方ねーよな。
なにしろ、俺はできるだけ早く朱里としっかり話がしたいんだから。

「…ちょっと顔貸せよ。」
俺は机から立ち上がり、朱里に向ってそういった。
周りにいた女子たちはビビッて道をあける。
…だから嫌なんだよ。
俺だって普通の男子だ。
女子にビビられんのはあまり気分のいいもんじゃねーんだよ。
「ち、ちょっと、あなたねぇ！」
お…？朱里の周りにいたうちの一人…黒髪のポニテの女子が俺をにらんで声を上げた。
「転校したばっかりの子に何しようっていうのよ！転校生いじめは許さないんだから！！」
…グサッと来た…今の言葉は……グサッと来たぜ…
いや、多少は自覚あったよ？でもさぁ…やっぱ、俺ってそういうイメージなんだな…
あらためていわれると……かなしぃ…俺のハートは３００のダメージを受けたっ！！
「いいわよ？どこに行く？」
こいつは変わらねーな。
というか、こいつは俺のことよくわかってるからこういう答えが返ってきて当たり前なんだがな。
「えっ…！！ちょ…危ないって、こいつあれだよ！？私の言っていた不良よ？」
うるせー！！本人いる前でそんなことを堂々と言ってんじゃねーッ！！
「大丈夫、大丈夫。で、どうするの？真二くん？」
「ん、屋上でも行くか。それでいいか、朱里？」
…さりげなく知り合いですアピールをしやがった朱里に乗って周りを黙らせてから、二人で教室を後にした。
ちなみに、廊下を歩いていると後ろから爆発のような声が聞こえてきたが気にしないことにした。

三限目　ラブコメ的席順（後書き）

どーも、ひさしぶりっす。
今回、ものっそい短いですが・・・ご容赦を。
だって、今年中にもう一話上げたかったんだよ。
まぁ、話はゆっくり進んでいく予定なのでゆっくり楽しんでください。

感想、誤字脱字、ついでに質問なんかもお待ちしてまーす。

四限目　Let’s Eat Lunch!!

俺たちは二人揃って階段を上っていた。
向かう先は…
「キャッ……」
「ははっ、そういえばお前は日の光に敏感だったな。」
そう、ちょっとだけ夏の気配の残った太陽が照りつける屋上だ。
いつもなら二、三組ここで昼飯をしているんだが、今日は誰もいなくて助かった。
振り返ってここへのドアを確認したが、覗こうというやつはいないみたいだった。
こういうときは、よくない意味で有名な自分に感謝だな。

「そういや、朱里。お前さ、大丈夫なのか？」
ふと、教室でのやり取りを思い出しそう聞いてみる。
「え？何が？」
「いや、何がって、教室で俺と親しいことみんなに暴露しちまっただろ？お前も変な目で見られなきゃいいんだが…」
そう、周りの俺に対する認識ってのは一言で言うと『不良』だ。
成績は悪くないし、授業もまじめに受けている。
それでも、よくケンカをしていたっていう『前科』があるせいで俺は周りから『怖い奴』という認識をされちまってるんだ。
「でも…」
「ん？」
「でも、真次君と一緒にいたらどっちにしてもそういう事になるでしょ？」
じっと俺の方を見ながらそういう朱里。
「あ、あぁ。まぁな。」
「だったら、いいよ。真次君と一緒にいられることの方が大事だか

ら」
そう、まっすぐに言われると少し恥ずかしくて、俺は顔をそむけながら
「そっか。」
と、そう言うのが精一杯だった。

とりあえず、昼休みは限られているため屋上に座って、母さんの弁当をあける。
…なんか、ピンクのふりかけでハートが描かれていたが全力で見なかったことにした。
「…彼女？」
おおう、後ろから殺気が漂ってくるぜぇ！
「いや、いないって。これ俺の母さんの弁当だし。」
「嘘だっ！！」
「ひぐ〇し！？」
いや、別にこいつも狙ってやったわけじゃないんだろうけどさ。
「どうして竜宮〇ナを知ってるの。真次君ってオタク？」
「はっはっは。その言葉そっくりそのまま朱里に返そう。というか、俺もちゃんと見たことあるわけじゃないけどな。」
つーか、俺ホラーとかあんま好きじゃねーんだよ。

「ふーん。…あ、そ、それ、ちゃんとつけてくれてたんだ。」
それ、都は俺の携帯についてる銀色の十字架のことだ。
「あぁ、まぁな。つかお前がくれた――――」
大事なものだからな。と後から考えるとめちゃくちゃ恥ずかしいことを口走りかけたその時。

「しぃぃぃぃんんんんんんじぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」
校舎へとつながる扉から聞きなれた大声が聞こえてきやがった。
「…誰か呼んでるよ？」

「いい。あいつなら5秒でここに来るから。」
俺がこういうと、なぜかマジで5秒で来やがるからな、あいつ。
「5……4……3……2……1……」
おい、そこでカウントダウンとかするなよ朱里。
ががぁぁぁんっ！！

0、と朱里の口から出た瞬間、俺の唯一の友達である霧花蓮一が屋上にダッシュで飛び込んできた。
手に持ってるサンドイッチから見るに、遅かった理由は地獄の購買に行っていたからのようだ。
そういえば、教室にもいなかったな。あいつ。
「おいこら、お前どういうことだぁ！！俺達は『もてない男同盟』を組んでいたじゃないかぁっ！！」
「そっちこそどういうことだ。俺はそんな悲しい同盟に名を連ねた覚えはねえ。」
「真次君、もてないの？よかった…」
なんか、隣でパンをかじっている幼馴染にひどいことを言われた気がするが、そこはスルーだ。聞いてない、聞いてない。俺は何にも聞いてないっ！！
「まぁ、冗談はともかく、俺にも紹介してくれるんだろうな？親友？」
そりゃ…まぁ、なんだかんだで世話になってるし、俺の近くにいてくれる奴なんてのはこいつと、朱里くらいだからな。
言われなくても紹介くらいするつもりだったさ。

「わーったよ。こいつはおれの幼馴染の夢前朱里。小学に上がるちょっと前から、5年の時まで一緒によく遊んでいたんだ。朱里、こいつは霧花蓮一。この学校唯一の俺の友達だ。」
「お前、その紹介は自分が悲しくならないか？」
そうかね？友達ってのは多けりゃいいってもんでもないと思うん

だが。
「よろしくね、蓮一君。」
「おおっ！！こちらこそよろしくお願いします！夢前さんっ！！」
そういえば、朱里ってこういう距離感のやつだったな。
友達、の中に入るやつは名前で呼ぶ。
それ以外は名字。
蓮一は…なにも言うまい。あのバカはあれで交友関係が広いんだからすげーと思うね俺は。

☆　☆　☆　☆　☆

バカが乱入してきたが、俺達の昼飯は平和に終わった。
と、思っていたのだが。
「うっ…」
昼休みの終わりごろ、朱里の様子がおかしいなーとは思っていたのだが。
教室に戻ろうと立ち上がった時、朱里が倒れてしまった。

「真次、保健室に運んどけ。俺が先生に伝えとくから。」
「サンキュー。恩に着るぜ。」
そう言い残し、俺は朱里を背負って駆け出した。
どうも、こいつの転校初日は平和に終わってくれそうもないな…
なんて考えていたんだが、マジでこの日は平和に終わってはくれなかったんだ。

四限目　Let’s Eat Lunch!!（後書き）

ちょっとだけ伏線的なものを。
色々あったので投稿が遅くなりました、すいません。
とか言いつつ、こんな感じの投稿スピードが続いていくと思われます。
読んでくださった方々、是非感想を書いてください。
ではー

五限目　転校初日の放課後

あれから、結局朱里は授業には出れなかった。
保険の先生が言うには貧血と若干体が弱ってたそうだ。
…おかげで授業に身が入らなかったぜ。後であいつに文句言ってやる。
クラスのやつらは、俺に何か聞きたそうにしてたが、結局誰もアクションをしてこなかった。
…その程度の勇気もねぇのかよ。カスどもが。

「でな、夢前さんと、敷島って幼馴染なんだとよ。」
「えぇっ！？それってホント？でも、それだったら昼休みのことも納得できるよね。」
…ん？んん？？なんか今、聞き覚えのある名前が聞こえたぞ？
「えー、嘘くさーい。…誰がそんなこと言ったの？」
「おいおい、嘘くさいってのはなんだよ。この話は、あの情報魔蓮一の持ってきた情報だぞ。」
…ああ、そうだった。口外するなって言ってなかったっけ。
まったく、俺としたことがうかつだったぜ。
…よし、シメに行こう。
その前に保健室かな。朱里が心配だ。

☆　☆　☆　☆

「朱里ー？いるかー？」
がらっ、と保健室のドアを開けながらそう言う。
が、中はガランとしていて誰もいなかった。
…先生の判断で帰したか、それともそこら辺にいるのか？
さて、どうするか…と俺がこの後のことを考えていると。

「何してるの？」
「あぁ、保健室まで来たけど朱里がいねーから…って、朱里！？」
「うん、朱里だよ？」
なんでそんなに驚いてるの？みたいな顔で首を傾げるなよ。
後ろから急に声をかけられたら誰でも驚く。
「…はぁ、お前は何をしてたんだ？」
ため息をつきながら俺は朱里に向かって聞く。
「…ちょっと、お手洗いに。」
顔を赤らめながら小さい声でそういう朱里。
…まぁ、体調は大丈夫っぽいな。
顔色も悪くないし、フラフラしてるわけでもない。

と、一安心していると。
「ねぇ、真次君。」
朱里に声をかけられた。
「なんだ？」
「…ちょっと、話したいことがあるの。いまから、いい？」
そんな上目遣いで俺を見るな……断わるに断われねぇだろうが…
「あぁ、いいぜ。どこにする？」
「えっと、屋上でいい？」
「あぁ。」
人に聞かれたくない話、ってことか。
…重要な話なんだろうなぁ。
とか思いながら、朱里のあとに付いて行った。
…なんか、忘れてる気がするが、まぁいいか。

☆　☆　☆　☆

屋上についてから、俺たちはお互いのことを報告しあった。
前にいた学校のこと、住んでた場所のこと…

けど、これが本題というわけではない、と思う。
なんとなく、だが。
長々と話していたせいで、もう日も暮れかけている。
空が紫色だ。
二人並んで、手すりに肘を置いて、沈んでいく夕日を見ている。

「…真次君は、変わらないね。」
「そうか？」
そういうお前も…とは言わなかった。
「そうだよ。ずっと離れてたのに、やさしいまま。」
…唐突だな。ついでにハズイ。
「そうかぁ？優しかったら、もうちょっと周りに人気あると思うぞ？」
赤く染まった頬を隠すようにそっぽを向いて、そう言ってみる。
「みんな見る目がないんだよ。蓮一君は、友達なんでしょ？」
「あ、あぁ。まあな。」
「噂とか、そういうのを機にしない人は、真次君の魅力に気付いてるわよ。きっと。」
「…だと、いいな。」
俺だって、話せるやつはそれなりにいたほうがいい。
一緒にバカやれる友達は、一人じゃさびしいもんがあるからな。

俺たちの間に、沈黙が訪れる。
けど、いやじゃない。
沈黙が苦にならないくらいの時間は、こいつと共有してきたつもりだ。
…久しぶりに会ってそれってのもすごいが。
何度かためらうそぶりを見せた後、朱里が口を開く。
「あの、真次君…その、ね？わたし、真次君に話さないといけないことがあるの…」

「何だ？」
うぅぅ～と言ったまま、口を閉じてしまう朱里。
これは待っていたほうがよさそうだ。
「えっと、その、わ、私実は…！！」

「っ…！！」
いやな感じがする。背中に、敵意を感じる。
「くっ…！！朱里っ！あぶねぇっ！！」
今までの喧嘩で散々味わったあの感覚、背後からの攻撃のときに感じる独特の寒気を感じた俺は、とりあえず、朱里を押し倒した。
ガギィンッ…！！という嫌な音があたりに響く。
何事かと思ってさっきまでいたところを見てみれば…
「…は？」
なんというか、え？何これ。
俺たちが肘を乗せていた柵に、なんというか、ぶっとい糸？としか言いようのないものが突き刺さっていた。
その糸をたどって目を向けてみれば…

「うわぁ…」
…うん？俺の目がおかしくなったのか？それともこれは白昼夢、Ｄａｙ Ｄｒｅａｍってやつか？
昨日の夢に出てきた大蜘蛛と、銃刀法違反の現行犯が、そこにいた。
目をこすってみる…消えない。ほっぺをつねってみる…痛い。
結論。夢じゃない。Ｉｔ' ｓ ｒｅａｌ.
「ほぅ、そこの少年は昨日殺したと思ったのだが…しぶといな。」
うるせ―っ！！この人切包丁がぁぁぁぁ！！
つか何？なんなんだよこの状況はっ！だれか説明プリーズ！！
「まぁ、その少年はどうでもいい。純粋な人ではないことは分かっている。それよりも、だ。」

そう言いながら、俺から朱里に視線を向けるえっと…侍（仮）。
つか、俺が人じゃないって何？どゆこと？
「夢前朱里。あなたに我らが組織『真夜中の赤月（ミッドナイト・ブラッディ・ムーン）』へ参加してもらいたい。」
「いやよ。わたしは、人が好きなの。」
「そうか…残念だな。」
なんかあの人、刀構えだしたんですけど。
うわー、殺気でピリピリするぜ。
朱里は？と思ったら、平気な顔…はしてないけど、あんま驚いてなかった。
まぁ、明らかにこいつら、朱里を知ってたからな。逆もありってことか。
さて、俺はどうするか…

母さん、俺はなんかよくわからんことに巻き込まれたようだ。今日も、家帰んの遅くなるかもしれない。頼むから飯は残しといてくれよ。

五限目　転校初日の放課後（後書き）

どもっす。秋月ヒロです。
えーなんだかんだで徐々にお気に入りが増えてます。
お気に入り登録してくれてる人、ありがとうっ！！
後は…感想、ください…お願いします…

六限目　人っていざとなったら結構大胆な行動に出るらしいよ。

みなさん、ご機嫌よう。敷島真次です。
俺は今、日の暮れた後の学校の屋上で、朱里と二人で並んでいる。
そこにあってほしい甘い雰囲気は一切存在しないが。
え？なぜかって？邪魔者がいるからだよ。
俺たちの目の前には、一匹の化け物と、刀を持った変質者が立っているのさ。
誰か、この意味不明な状況を説明してくれ……

そんな現実逃避をしている間も、二人は話している。
「ふうむ。仕方ないな。ここは、実力行使しかないか。」
「…どうする気よ？」
わっ、やめっ、お前、殺気出すな。痛い！痛い痛いっ！！ピリピリするんだよ！！
朱里も、おびえながら殺気出すってどんな芸当だよ！しかもお前のも地味に痛いし！！
「こちらにきてもらおう。」
「…？」
意味がわからない。朱里は『いかない』って言ってたよな？何？耳悪いのこいつ？
そう思ったが、次の一言で俺の背筋に寒気が走った。
「ふむ…とりあえず、五体満足である必要はないからな。瀕死でも構わない。」
な…何なんだよ…！！こいつ…！！
ここで朱里を…半殺しにでもする気かよっ…！！
とりあえず逃げないとヤバい！！
と、心の中であわあわしてる俺に向かって、刀を持った男が肉薄

してくる…！！
それを見た瞬間、俺は反射的に一歩踏み出していた。
なんでかは俺が聞きたい。とにかく踏み出した。
そして、地を這って迫ってくる刀を左足で踏みつけ、体勢を崩したやつの顔面に右足のひざを入れてやった。
「ぐぁっ！！」
野郎は短く悲鳴を上げ、軽く吹っ飛んだ。
飛んでくとき、血が弧を描いて飛び散ってたから、鼻でも折れたのかもしれん。
たぶん、ちょっとの間は動けないはずだ。
受け身が取れてなかったから、頭をコンクリでしたたか打ったにちがいねぇ。
喧嘩でいろいろ鍛えてたからな。なめんなバーカ。
そして、とりあえず俺の後ろにいた朱里の手をとって叫んだ。
「朱里っ！！逃げるぞっ！！」
「ふぇ！？う、うんっ！？」
そんでもって、空いた左手をブレザーの内ポケットに突っ込み、秘密兵器を取り出す。
それはこれまでにも人質の救出や、国家権力からの逃走において絶大な威力を発揮してくれた俺の相棒……！！
そう、俺謹製っ、敷島印の煙玉だっ！！！
「せいっ！！！」
卵大の大きさの玉を思いっきり地面に叩きつける！
ボフンッ！と音がし、周りが白い煙幕（こむぎこ）で包まれた。
それと同時に俺は朱里の手を引いて屋上から逃げ出した。
ちなみに、化け蜘蛛のほうは気持ち悪かったので全力でスルーさせていただきました。
気づかれなかったようでなによりです。

☆　☆　☆　☆

で、懸命な逃亡の末、俺たちは今、地上まで降りてきた。
校舎の壁を背に、周りを警戒する。
辺りはすっかり日が暮れ、闇に包まれていた。
うちの学校は、校門の次に駐輪場があり、その奥に校舎、そしてそのまた奥にグラウンドがあるというちょっと変わった造りなのだが、俺たちは今グラウンド側にいる。
逃げるならさっさと校門から出ればいい、とか言われるとそのとうりなんだが、いかんせんこの時間になるともうすでに校門がしまっていて、乗り越えるのは大分難儀する。
さらに言うと、電気も全部落ちてるから駐輪場が暗いんだよ。
そんな中を歩くのはリスクが高すぎる。
相手が何なのかよくわからないんだから。

「…動きがないな。まだ屋上にいるのか？」
「……」
周りを確認したが、やつらはいなかった。
もっとも、あの化け蜘蛛なら飛び降りてきたり、壁を歩いて降りてきたりしかねないが。
「真次君。」
「なんだ？」
「あの…ね？手……」
「あ？…あ。」
頬に朱が差した朱里に言われて気付いたが、俺、手を握ったままじゃねーか！！
「わっ…ワリぃ…」
「う、うん…」
……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！何なんだぁっ！！なんだよっ！この桃色空間っ！！
俺たちはお互い顔を赤くしてそっぽを向いた。

恥ずかしい…なんか、めちゃくちゃ恥ずかしいっ……！！！

しばらくそうしていたんだが、少しして朱里が口を開く。

「ね、ねぇ、真次君？」

「あ、あぁ、なんだ？」

「えっとね？屋上での話の続き…なんだけど…」

「お、おう。」

「私…私ね…あの…その…」

と、ためらっているとお約束というかなんというか…

「こぉぉのぉぉぉくぅぅそぉぉがぁぁきぃぃがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

という声が上から降ってきた。

めちゃくちゃいやな予感がしたから上を見上げると…

ひ　と　が　ふ　っ　て　き　た！

屋上でひざ蹴りの餌食になった野郎が、おおおお！！とか叫びながら刀を大上段に振りかぶって落ちてきやがった……！！！

どがぁぁぁぁぁぁんっ！！！という爆砕音とともに野郎が着地。

たぶん、刀も振り下ろしてた。

コンクリの地面が砕け、マンガみたいに土煙が舞った。

「きゃぁっ！！」

「うおおおおっ！？」

と、叫びながら俺たちは緊急回避、ハリウッドダイブ。

あれだ、とりあえず身を投げ出して、ヘッドスライディングの体勢で着地するやつ。

痛かった…そして危なかった…。

つか、こいつ屋上から飛び降りてきたのか！？

「朱里っ！！無事かっ！？」

「うんっ…！なんとかっ…！！真次君は？」
「俺も大丈夫だ。とりあえず逃げるぞっ！！」
言いながら朱里の手をとり、あることに気付く。
――――あいつが落ちてきたってことは、あの化け蜘蛛はどこだ…？

とか考えつつもふと振り返ると、ゆらり、と土煙りの中に影が立ち上がった。
あいつ…どんな体してるんだよ…
「真次君っ！後ろ！！校舎の壁！！」
朱里の悲鳴につられてそちらに視線を向けると…
いましたよ。例の化け蜘蛛が。どうしてくれようかこいつら。
俺達にできることは逃げの一手だ。だからどうにかしてここから離れる。それが最優先だ。
けど、なぁ……
とりあえず、これだけは言っておこうかな。
「Ｉｔ（イッツ）ｓ ａ（ア） ｐｉｎｃｈ（ピーンチ）……」

六限目　人っていざとなったら結構大胆な行動に出るらしいよ。（後書き）

なんやかんやで投稿できたぜっ！！
まぁ…次はいつになるか分かんないんだけどね……
あ、そうだ、あと感想ください！待ってます。

七限目　覚醒

「おわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
どがぁぁぁぁぁんっ！！！
大蜘蛛の放った似非モーニングスター（蜘蛛の糸を丸めて作ってた）が地面を砕く。
俺達はかろうじてそれをよけたが、土煙が周りにもうもうと立ち込めた。
「つっ…朱里！無事か！？」
「うん…まぁ、なんとかね…」
ざっと見たところ、ちょっとしたすり傷はあるが何ともないようだ。
ちょっとだけ安心し、少し気が抜けた瞬間、背筋に寒気が走る。
俺が後ろを向くと、刀の野郎がすぐそばまで迫って来ていた。
――――っ！！速すぎるっ！！
迎撃は不可。とっさにそう判断した俺は、その刃から朱里を守るため、朱里を突き飛ばした。
そのため、俺は回避する時間を失くしちまった。逆袈裟に振り上げられた刀が俺に向かってくる。
「おおおおおっ！！」
無理やり身をひねったが、バギィッ！！という嫌な音とともに、俺の左腕に激痛が走った。
「真次君っ！？」
バックステップで距離をとって、右腕を朱里を庇うように出す。
峰打ちされた左腕を見ると、肘と手首の中間あたりで変な方向に曲がっていた。
…きれいに折れたな、こりゃ。
あーあ…明日からギプスがいるなぁ…。

「あの状態からならいけると踏んだのだがな」
奴は俺の左腕を見ながらそんな事を言いやがった。
「けっ…伊達に喧嘩ばっかしてたわけじゃねーんだよ」
そう言って、俺達はにらみ合う。
…こいつの狙いは間違いなく朱里だ。しかも、本気を出してない。
はぁ、勝てる気がしねぇな。
そんな感じで、若干ネガティブになるが、そうもいってられない。
俺の後ろには、朱里がいるのだから。

左腕の痛みをこらえながらやつに向かって駆け出した。
「おらぁあああああっ！！」
右のこぶしを握りしめ、腕を振り上げる。
向こうは刀を右側の腰にまわす。
奴の横薙ぎに合わせて、俺はこぶしを振り下ろす。
「かはっ！！」
「ぐぁっ！！」
俺のこぶしは相手の刀を持つ手に。
相手の刀の峰は俺の脇腹に。
それぞれ突き刺さる。
……どう見ても俺の方がダメージでけぇな。おぃ。
あまりの痛みに膝が笑ってやがる。
相手は刀を引き、今度は逆袈裟に振り上げやがった。
……俺は、痛みのせいで体が動かない。
そのせいでモロにそれを喰らうはめになっちまった。
腹から胸にかけて強い衝撃が走り、俺はそのまま吹っ飛んだ。
痛すぎるせいか、もはや痛みは感じない。
そして俺の体は地面を滑り、朱里の近くで止まる。
「ふん……雑魚が……」
……体が、動かねぇ。
倒れた状態で、俺は奴がこっちに歩いてくるのを見ていた。

やめろ。それ以上朱里に近づくな。
やめろ。頭の中で何かが警鐘を鳴らす。
そいつをそれ以上朱里に近づけるな。
そしてそいつは、俺の頭の上で刀を振り上げる。
「やめてっ！！」
俺の体の上に、温かい何かが乗った。
「しゅ、り……お前こそ、やめろ……」
「これ以上、真次君を傷つけないで！！」
俺の声を無視し、俺に覆いかぶさる朱里。
その朱里に向って刀を振り下ろそうとしている奴を見た瞬間。
俺の中の、何かが切れた。
やめろ。
やめろ。
オレノセイデシュリガキズツクナンテコトダケハ、シンデモユルセナイ。
「やめろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

俺の叫びと同時に奴の刀が振り下ろされる！！
刃は……返されてない。
俺の目には、奴が刀を振り下ろす光景がやけにゆっくりと映った。
そしてその刃はそのまま俺と朱里を切り裂くかと思いきや。
ガキン、という固い音があたりに響いた。
「！？」
その場にいる全員に衝撃が走る。
俺の目がおかしくなってないのなら、俺達と奴の間を「何か」が隔てている。
「朱里、ありがと。大丈夫だから、どいてくれ」
「え！？　で、でも……」
「問題ねーからよ」

そういうと、しぶしぶといった感じで朱里は俺の上からどいてくれた。
たちあがって、奴とにらみ合う。
こっちから見ると、奴の姿は、いや、この「何か」の向こう側全部が色ガラスを通して見ているみたいに赤く染まって見える。
どー見てもこいつが奴の刀を止めてるんだよな。
……それはそうと、さっきから体が妙に熱い。
力があふれてくるような、妙な感覚だ。
不意に俺の左腕から、ゴキン！という嫌な音が鳴った。
見てみると、ぶらぶらしていない。……骨がつながったのか！？
さらに体のあちこちから煙が上がり、傷が修復されていく。
「真次、くん……？」
朱里が驚いたような声を出しているが……わりぃな。俺にも何がなんだかさっぱりわからん。
「貴様……何をした……！？」
敵さんも驚いたような声を出しているが、わりぃな。以下同文。
「ん……？」
制服の胸ポケットから光が洩れている。
引っ張り出してみると、朱里にもらった十字架が、目の前の「何か」と同じ深紅の光を放っている。
俺は導かれるように、その十字架を携帯から外した。

「な……！！」
「なんだと……！？」
外した瞬間、俺の体はまばゆい深紅の光に包まれた。
「くぅっ……まぶしっ……！」
そして視界の晴れた俺の目に飛び込んできたのは、右腕に装備されたナックル？　だった。
「なんだこれ……？　って、これよく見たら朱里の十字架じゃねーか！！」

俺の右腕は、ひじの少し下あたりまで2本の鎖が逆方向に重なるように巻きついている。
そして、握ったこぶしの先――指の根元から第二関節の間あたりには、朱里にもらった十字架が鎖で固定されていた。
その十字架は、真ん中に引いてあるラインと、十字が交差している部分にはめ込まれている石に沿って分離し、それぞれのパーツを赤い光がつないでいる。
……武装〇金のサンライトハート＋の展開状態に似てるな。
なんだかよくわからんが、今のおれは負ける気がしない。
あれにも、勝てそうな気がする。
「朱里。」
「え？」
俺は、後ろを振り返り朱里に笑いかける。
「お前は、俺が守るから。」
そう、俺が言うと、朱里はなぜか目に涙をためながら、
「……ッ！！　うんっ！！」
ひどく嬉しそうで、どこか申し訳なさそうな顔をしながら、うなずいた。

けど、俺は気付かなかった。
俺のその言葉を聞いた瞬間、目の前のやつの顔が心底おかしそうに歪んだことに。
奴が、俺のことを、この場においては俺以上に知っていて。
奴が、朱里のことを、ある一面においては俺以上に知っていることを。
俺は知らなかったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4481p/

学園吸血恋愛奇譚――その初恋が実るとき――

2011年7月24日03時19分発行